

過疎地域における外出促進のための コミュニティカフェの機能に関する研究

山崎 康平¹・岸 邦宏²

¹学生会員 北海道大学 大学院工学院 (〒060-8628 北海道札幌市北区北13条西8丁目)

E-mail:k.yamazaki@eng.hokudai.ac.jp

²正会員 北海道大学 准教授 大学院工学研究院 (〒060-8628 北海道札幌市北区北13条西8丁目)

E-mail:kishi@eng.hokudai.ac.jp

本研究では、コミュニティカフェが果たす役割として、外出促進効果があるのではないかという仮説をたてそれを証明すると同時に、外出促進効果を持つためのコミュニティカフェの形を明らかにするために意識調査を行った。分析方法は数量化理論 2 類を用いた。分析によって得られた偏相関係数を使い目的変数を外出確率とし、コミュニティカフェの機能別に外出確率を求めた。その結果、大学生との交流、サークル活動やまちづくり活動への参加機会が得られるようなコミュニティカフェの外出確率が高いことが明らかになった。

Key Words : Rural area, Community Bus, Community Cafe, Mathematical Quantification Theory

1. 本研究の背景と目的

人口減少、高齢化が進む過疎地域において、どのようにして公共交通を維持するかが問われて久しくなっている。多くの過疎地域で、デマンドバスや乗合タクシーなど需要応答型公共交通の導入が進められているが、便数が少ないことによる利便性の向上をどうするかが課題となっている。

また、このような地域では中心市街地の活性化も課題となっており、地域住民が集まり、交流できる場所が必要とされており、近年はコミュニティカフェが注目されている。

筆者らは、便数が少なく、帰りのバスの待ち時間を有意義に過ごしてもらう視点で、待合所としてのコミュニティカフェの機能の評価した。しかし、中心市街地活性化の視点から、魅力あるコミュニティカフェがあることによって、住民の外出回数が増加し、公共交通と一体化したまちづくりに寄与する可能性があると考えた。

そこで本研究は、どのようなコミュニティカフェが住民の外出回数の増加に影響を与えるか、コミュニティカフェの機能に着目して分析を行うことを目的とする。本研究では、北海道浦幌町を分析対象地域とした。

2. コミュニティカフェ

(1) コミュニティカフェの概要

コミュニティカフェとは、地域社会のなかで住民の交流を促して、地域の問題解決を図る目的で設立され住民が集まる場所として定義される。地域ならではの特色や集まる人々に合わせた様々な催しを行っている。

地域コミュニティの機能の低下、住民同士の関わり希薄化や地域への愛着・帰属意識の低下が危惧されている今日、サークルや老人クラブなど特定の目的による「つながり」だけでなく、新たなコミュニティを生むようなさまざまな人が交流する場が必要とされている。

コミュニティカフェの実態に関する調査¹⁾では、全国のコミュニティカフェの運営目的で割合が高いものは、地域活性化や地域貢献、次いで高齢者や子供の福祉関連となっている。

(2) 既存研究と本研究の位置付け

コミュニティカフェの既存研究としては、バスの帰りの待合場所としての、コミュニティカフェの評価を行ったものがある²⁾。ここでは待ち時間を減らすためにバスを増便するのではなく、待ち時間をコミュニティカフェで有効に過ごしてもらうことで、バスの低いサービスレベルを補えることを明らかにした。さらにその後、筆者

らは北海道厚真町、日高町においてコミュニティカフェの実証実験を行った。

本研究はこれに対して、中心市街地に魅力的な場所ができれば、外出目的が増える可能性があると考え、コミュニティカフェがその役割を果たすにはどのような機能が必要かを明らかにするものである。



図-1 厚真町でのコミュニティカフェの実験

3. 研究対象地域

本研究では北海道十勝郡浦幌町(図-2)を対象として、外出促進のためのコミュニティカフェの機能について分析する。浦幌町の人口は 5480 人、世帯数は 2415 戸となっている(平成 24 年 12 月 31 日時点)。町は南北に長くなっており南側の JR 浦幌駅周辺に市街地を形成している。

浦幌町の高齢化率は 33. 5%と非常に高く、今後も高齢化の進行によって、公共交通しか移動手段のない住民の増加が見込まれる。

しかし、浦幌町は路線バスが廃止され、現在は本別・浦幌生活維持路線バス、患者輸送バス、留真温泉無料バス、スクールバスが運行しているが、利用者が限られていることや、利便性が低いことが問題となっている。

そのような中、浦幌町では平成 25 年に「浦幌町生活交通ネットワーク計画協議会」が設立され、コミュニティカバスの運行とともに、中心市街地の活性化方策としてコミュニティカフェの実験が行われる予定であることから、本研究の対象地域とした。



図-2 浦幌町の位置

4. 意識調査と評価要因の設定

(1) 意識調査の概要

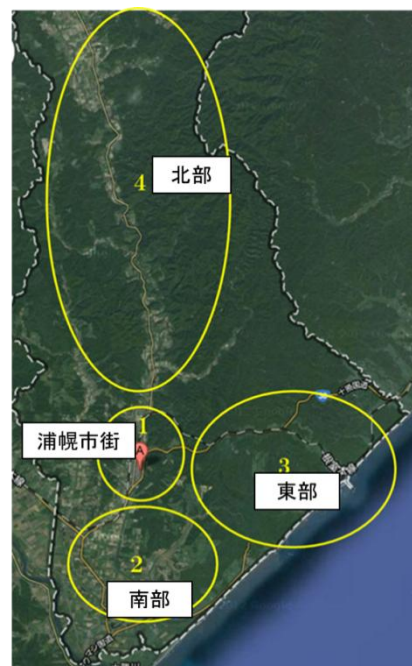
表-1に実施概要を示す。実施するにあたり町内全域(図-3)へ表-2のような各地域ごとの世帯数の割合を考慮して配布を行った。

表-1 実施概要

調査日	2012年12月19日	
調査方法	投函配布・郵送回収	
配布数	485世帯	970票
回収数	166世帯(34.2%)	264票(27.2%)

表-2 地域別回収数

地域	配布票数	回収票数
1. 浦幌市街	620票	183票
2. 南部	120票	32票
3. 東部	80票	19票
4. 北部	150票	30票



10km

図-3 調査票配布対象地域

(2) コミュニティカフェの機能に関する評価要因の設定

評価要因の設定にあたり、全国のコミュニティカフェでどのような取組みが行われているかを参考にした。また既存研究で行われていたことなどを要因の設定の参考にした。

評価要因として世代間交流、食事の機能、まちづくり活動への参加機会、他の人へ貢献する機会の4つに設定した。表-3に示した4要因とその水準を設定し、表-4のように18直交表を用いた設問にし、各状況に対してコミュニティカフェへ行くか行かないかを尋ねた。

表-3 要因と水準

水準	要因			
	世代間交流	食事の機能	まちづくり活動への参加機会	他の人へ貢献する機会
水準1	小学生	あり	あり	あり
水準2	大学生	—	—	—
水準3	同年代	なし	なし	なし

表-4 18直交表への割り付け

状況	要因					
	小学生	大学生	同年代	食事	まちづくり活動	貢献
1	いない	いる	いない	あり	あり	なし
2	いない	いない	いる	あり	なし	あり
3	いる	いない	いない	あり	なし	なし
4	いない	いる	いない	なし	なし	あり
5	いる	いない	いない	なし	あり	あり
6	いない	いない	いる	なし	あり	なし
7	いる	いない	いない	なし	なし	なし
8	いる	いない	いない	あり	あり	あり

以上のようにコミュニティカフェの要因を設定し、割り付けたものを図-4のような形で設問にした。



図-4 コミュニティカフェに関する設問の一例

(4) 個人属性の集計

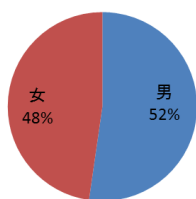


図-5 男女比

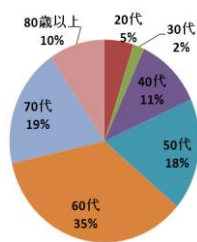


図-6 年代

男女比はほぼ同数であり、年代に関しては60代以上の回答者の割合が多くなっている。しかし、実際のコミュニティカフェの利用者は高齢者が多いと思われるため、本研究への適用は問題ないとする(図-5、図-6)。

5. コミュニティカフェへの外出意識の分析

(1) 浦幌市街の住民

本研究ではコミュニティカフェに行くかどうかに関して、数量化理論2類を用いて分析した。

外的基準はコミュニティカフェへの外出意識(行く、行かない)であり、アイテムは以下の通りである。

次に略称について記す。

x_{uni} :大学生との交流, x_{same} :同年代との交流

x_{city} :まちづくり活動への参加機会, x_{for} :他の人へ貢献する機会, x_{meal} :食事の機会

以下、個人属性の説明変数となっている。

x_{health} :健康促進に興味がある, x_{chat} :おしゃべりが好き

x_{going} :外出が健康に繋がると思う, x_{like} :外出好きか

すべて0か1かを入力する。

$$Y = 0.0374x_{uni} + 0.0264x_{same} + 0.1176x_{city} + 0.0242x_{for} + 0.0752x_{meal} + 0.1357x_{health} + 0.3347x_{chat} + 0.2645x_{going} + 0.1301x_{like} \quad (1)$$

表-5にこのモデルの判別確率と相関比を示す。

表-5 判別確率と相関比

	行かない	行く	相関比
判別確率	68.85	71.15	0.44

図-7にそれぞれの要因の偏相関係数をグラフとして表す。

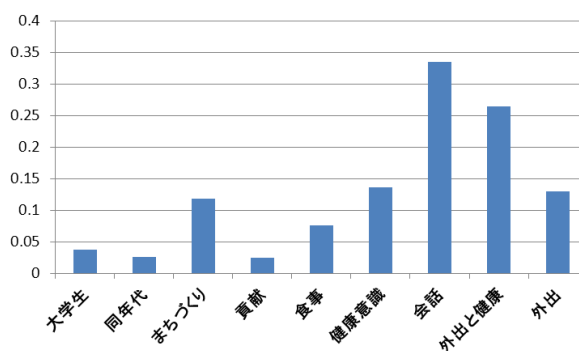


図-7 偏相関係数(浦幌市街)

(2) 浦幌郊外の住民

$$Y = 0.0347x_{uni} + 0.0103x_{same} + 0.0316x_{city} + 0.0226x_{for} + 0.0777x_{meal} + 0.3710x_{health} + 0.2769x_{chat} + 0.2300x_{going} + 0.1573x_{like} \quad (2)$$

表-6にこのモデルの判別確率と相関比を示す。

表-6 判別確率と相関比

	行かない	行く	相関比
判別確率	76.99	73.91	0.47

図-8にそれぞれの要因の偏相関係数をグラフとして表す。

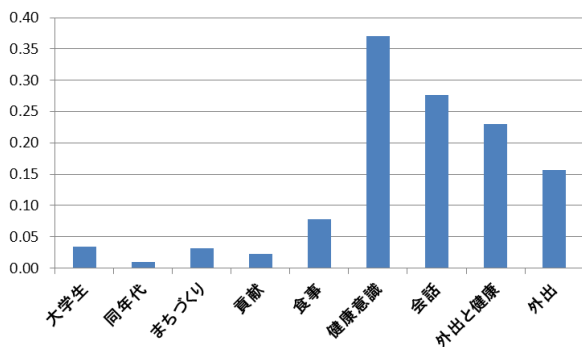


図-8 偏相関係数(浦幌郊外)

(3) コミュニティカフェによる外出促進効果

以上の分析により、浦幌市街の住民と郊外の住民では、コミュニティカフェにより外出確率が異なることを示した。浦幌市街のコミュニティカフェを想定したため、郊外の住民の外出確率は低い。健康促進に興味がある人や会話が好きな人といったそれらの意識が高い人であれば、例えば郊外部に住んでいたとしても外出し、コミュニティカフェへ行くという結果を得られた。

続いて次の状況を設定し、コミュニティカフェの外出確率を比較する。コミュニティカフェには大学生との交流、まちづくり活動への参加機会と食事の機会、サークル活動には同年代との交流、まちづくり活動への参加機会、通常のカフェには同年代との交流、食事の機会がそれぞれ機能するとし、コミュニティカフェ、サークル活動と通常のカフェの外出確率を図-9に表す。ただし外出確率を導く上で用いたモデル式は、浦幌市街の住民を対象とした分析結果の式(1)である。

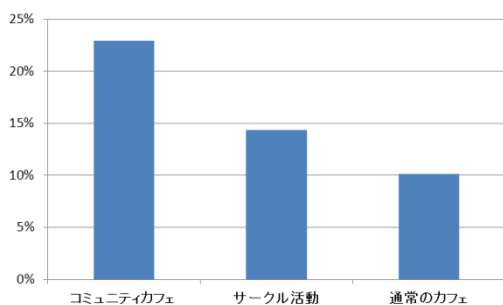


図-9 コミュニティカフェの機能別の外出確率

図-9より、他よりもコミュニティカフェに外出促進効果があると言え、新たな外出目的となり地域住民の浦幌市街への外出頻度が上がる。市街地へ出る人が増えることにより、活性化にも繋がると考えられる。この時に公共交通機関との連携は欠かすことができない。前述したように町内で運行しているバスは利便性が低い。運行予定のコミュニティバスが利用者のニーズにあった運行をし、市街地への外出の流れが改善され、コミュニティカフェが浦幌市街地へ外出する目的の一つになること

も考えられる。

加えて外出による生活習慣の改善などの健康維持促進や、コミュニティカフェを利用し様々な人との交流や活動の参加による、精神面への良い影響、例えば性格の明転や積極性の増加などが考えられる。すなわち、コミュニティカフェがあることによって利用者は利用するだけでなく、健康的な効果を得ることができる。

6. 浦幌町におけるコミュニティカフェの展望

(1) 世代間交流の可能性

世代間交流は、大学生との交流が一番良いという結果が得られた。コミュニティカフェのなかで大学生と交流するということは、既存研究²⁾でも成されていることであり、今まで行われていた活動がコミュニティカフェとして評価された。しかし、浦幌町には大学がないことが、大学生との交流を考える時の問題点となる。そこで全国の取組みを参考にすると、大学生や若者が社会体験や実習などの場として提供されている例もあり、浦幌町においてもコミュニティカフェをそのように活用することで問題点の解消が図られると考える。

(2) うらほろスタイル³⁾とコミュニティカフェの連携

コミュニティカフェの要因のなかで、まちづくり活動への参加機会が分析(図-7)によって一番重要なことが明らかになった。

コミュニティカフェが地域住民を巻き込むまちづくり活動の拠点となることにより、多世代間の交流がなされ町内が一体となる協力体制が構築できると考える。

浦幌町では、「地域に対する自信と誇り」や「思いやりと支え合いの心の育成」の二つを伝え、浦幌町の将来を育むための、うらほろスタイルという地域が一体となった取組みが行われおり、地域資源を活用したふるさとづくりとなっている。そのなかでは、主に次の3つのことが行われている。それは「地域への愛着を育む事業」、「子どもの思い実現事業」、「農村つながり体験事業」の3つである。そこで本研究では、コミュニティカフェとうらほろスタイルが協力し、まちづくり活動を行うことを提案したい。

参考文献

- 1) 大分大学福祉科学研究センター：「コミュニティカフェの実態に関する調査結果」(2011)
- 2) 梶沼翼、岸邦宏：「過疎地域におけるコミュニティカフェの機能と評価に関する研究」土木計画学研究・講演集、vol42、CD-ROM 2010
- 3) うらほろスタイルふるさとづくり計画
URL: <http://www.urahoro-style.jp>